

資本主義は社会主義に必ず変わる

『空想より科学へ社会主義の発展』に学ぶ

第9回 東京ブロック

近代社会主義どう生まれてきたのか

司会Ⅱいよいよ第三章「資本主義の発展」に入ります。レポートを担当した東部協の皆さんから第二章をどのように学んでいくか、はじめに考え方を出示してください。

SKⅡ第三章は、前回、「唯物史観」を学び、下部構造の経済構造の変化・発展が社会の発展の原動力とまなびなりました。今回から、65頁〜92頁を、9月号〜11月号の三回で行います。主要部分のみのレポートになります。90頁以降に「結論」として、歴史的発

展の跡を簡単に概括しよう」とエンゲルス自身がまとめてあります。これらを参考にしました。

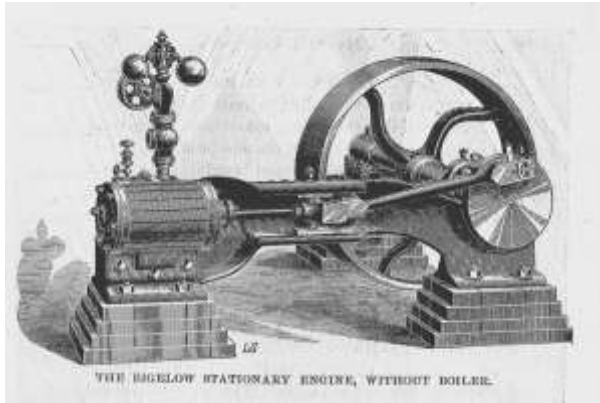
今回の前半はGOが、後半をSNが担当します。10月号は私・SKが、11月号はKBが担当します。

司会Ⅱ東部協は事前に準備し、レポートを分担したそうです。では、GOさんお願いします。

GOⅡ私が担当するのは、65頁〜71頁です。前章で学習したように、唯物史観は、経済構造（生産・分配・交換―消費）が土台であり、それがどのよ

うに行われているかで社会制度が変わると学んできました。一切の社会的変化と政治的変革の究極原因は、人間の頭のなかに、永遠の真理や正義に求むべきものでなく、それぞれの時代の経済のうちに求むべきものである。生産方法と交換形態が暗黙のうちに変化して、これまでの経済的条件にあわせてつくられていた社会秩序がそれにうまく合わなくなってきたという証拠にすぎない。

すなわち、この変化した生産関係そのもののうちに、存在しているに違いないと、頭で發明されるのではなく、



蒸気機関

物質的事実の中に頭を使って発見されるべきものだ、と明らかにしました。ブルジョアジーは封建制度を打ち壊し、その廢墟の上にブルジョア的の社会制度を打ち立てました。資本主義的の生産方法は自由に發展できるようになり

蒸気と新しい作業機とが旧来のマニユファクチャーを大工業に変えて、ブルジョア主導で作り出された生産力は、前代未聞の速さと規模で發展しました。大工業もその發展につれて、資本主義の生産方法と生産力が衝突(矛盾)するようになりました。

近代社会主義とは、こうした事実上の衝突の解決には、直接苦しんでいる階級、労働者階級の頭の中にうつつた思想的映像以外の何ものでもない、とエンゲルスは説いています。

それでは中世の封建社会から資本主義生産方法の萌芽がどのようにして生まれたか、それで生産方法の變化、また生産物の所有の變化や、資本主義生産方法の新たな矛盾について、順次、説明していきます。

生産方法の社会化

中世では生産手段を私有する基礎の

上に立つ小経営が一般に行われていました。自由農民、隸農による小農の農業、都市の手工業は、各人の労働手段——土地、農具、仕事場、道具——は、各人の労働手段であつて、小型で小さい能力のものでした。このばらばらの小さい生産手段を集中し、拡大し、現代のような強力な生産の横杆(こうかん)とすること、そこそが資本主義的生産方法と、その担い手たるブルジョアジーの歴史的役割でした。

15世紀以来、單純協業、マニユファクチャー、大工業の三段階を経てこの役割を果たし、ブルジョアジーは小さい能力の生産手段を巨大な生産力にするため、個々人の生産手段を社会的な人間の集団によつてのみ使用できるものに変えざるを得ませんでした。

一連の個人的行為から一連の社会的行為にかわり、生産物も個人生産物から社会的生産物へ変わり、俺がつくつた、俺の生産物だ、と誰も言えなくな

りました。

所有（取得）の個人性

中世では、農民は農産物を手工業者に売り、そのかわりに手工業者から手工品を買っていた。このような個人的生産者の社会、商品生産者の社会の中に新しい生産方法が入りこんできました。今まで全社会を支配していた自然発生的、無計画な分業から、個々の工場内には計画的な分業が持ち込まれ、個人的生産と並んで社会的生産が現れ、双方の生産物は同一の市場で、ほぼ同じ価格で売られました。

工業、賃労働と結びつき、社会的生産そのものは、商品生産の新しい形態として出現し、商品生産の取得形態は社会的生産にもそのままひきつづいてあてはまりました。

資本主義生産の基本的矛盾

中世に発達した商品生産Ⅱ剰余生産物の交換Ⅱは、自分自身の労働手段を用い、自分自身もしくは家族の主労働で生産したので、彼自身の所有（取得）です。

そこへ大作業場やマニユファクチャーにおける生産手段の集中、事実上の社会的生産手段への転化が出現したのです。この社会的な生産手段と生産物は、これまでどおり個人のものであるかのように取り扱われてきました。それは労働手段の所有者がこれまでどおりその生産物を取得することになったのです。

社会的に生産されることになった生産物を取得する人は、生産手段を現実には動かし、生産物を現実には生産する人でなくて、（生産手段を私有する）資本家です。この矛盾こそ、新しい生産方法・社会的生産と資本主義的取得（私的所有）と対立し、新たな生産力と生産関係の矛盾としてあらわれます。司会Ⅱはい、テキストに沿った忠実なレポートありがとうございます。経済用語もありわかりにくい部分があるので、Mさん、ざっくり封建制社会から資本主義社会へ変わって、何がどのように変化したのか、整理して下さい。MⅡ中世Ⅱ封建社会では、自由農民もしくは小農の農業は、労働手段―土地や農具は各個人のもので、その個人や家族で働き、その生産物は働いた本人のものであり、その本人や家族で消費していました。

資本主義社会になると、生産力を増大するために、また剰余価値の取得

◆みんなの学習講座

のために、ブルジョアジーは、生産手段の改良と発展に努力し、労働力商品を買ってしか生活できない労働者（賃労働）を雇い、商品生産を行ないます。分業が進み、より社会的に生産されるが、労働者には賃金という形で分配され、生産された商品は生産手段の所有者であるブルジョアジーのものとなり、剰余価値を取得します。

生産方法は、ますます社会的になるが、生産手段並びに生産物の私有化という対立・矛盾が生まれてきたということです。

司会⇨簡潔にありがとうございます。質問はありますか。

HG⇨67頁、後6行目「現代のような強力な生産の槓桿とする」とあります。この「槓桿」と言う意味や内容を教えてください。

HT⇨槓桿を辞書で調べると梃子（てこ）と出てきます。物理的には、梃子は小さな力で大きな物を動かすことで

す。

HG⇨だから「生産の槓桿」とは何ですか。

OK⇨エンゲルスの原文はあっても読めませんが、翻訳者によって「槓桿」を使用したり、「梃子」を使用したりしています。この本が発刊されたのは『共産党宣言』発刊から30年、『資本論』第一巻がマルクスによって発刊されていたことを考えると、特に産業革命後は、マニユファクチャーが大工場へ変わり、小さい能力の生産手段を強大な生産力にした。それにより、相対的剰余価値の生産を増大させたということだと思えます。

司会⇨労働手段と生産手段と出てきます。違いについてわかりますか。

U⇨労働の三要素と言われています。マルクスは、人間は自然的な動物であり、自然に働きかけ、食・住・衣を得ています。この自然に働きかける行為を「労働」と名付けました。働きかけ

られる側は、労働対象であり、何によって働きかけるかが「労働手段」（労働用具・道具）であり、労働するのは人間各人です。

生産手段は、この労働対象と労働手段が一緒になったものと理解してきました。

M⇨農具、道具は各個人の労働手段であって、個人しか使用しないもの、小さな能力のもの。その小さい能力の労働手段を強大な生産力にするために、個人個人の労働手段を、社会的な人間の集団によってのみ使用できるようになって、生産手段となった、と私は理解しました。

OK⇨どちらも正しいように思えるが、基本的な整理が必要だと思えます。

どちらも言っているように、労働過程は、労働と労働手段と労働対象の三つからできています。中心は労働手段です。その労働過程は労働手段によって決まります。



では、生産過程とは労働過程に人と人との関係が加わったものです。具体的なパン工場を例に見れば、大勢の労働者が働きます。同じ作業だけでなく、分業された個々の作業が繋がって、一個のパンが作られます。パンを作る労働者だけでなく、企画立案する人、各人の仕事を監督する人、命令を出す人

商品を検品する人、梱包・搬出する人など多くの人と人の関係が「網」のなかでパンを作る労働過程が行われています。これが現実の社会であり、「生産」と呼び、労働過程と対にすれば生産過程です。

言い換えれば、労働過程とはいかなる社会をも律する抽象的概念であり、人間は現実の社会では、社会の構成員としてのみ存在します。したがって労働過程を社会的に捉えた時、それを生産過程と言います。労働過程は具体的にはそれぞれの社会の性格を持つ生産過程として現れ、資本主義社会では、それは資本主義的生産過程として現れます。

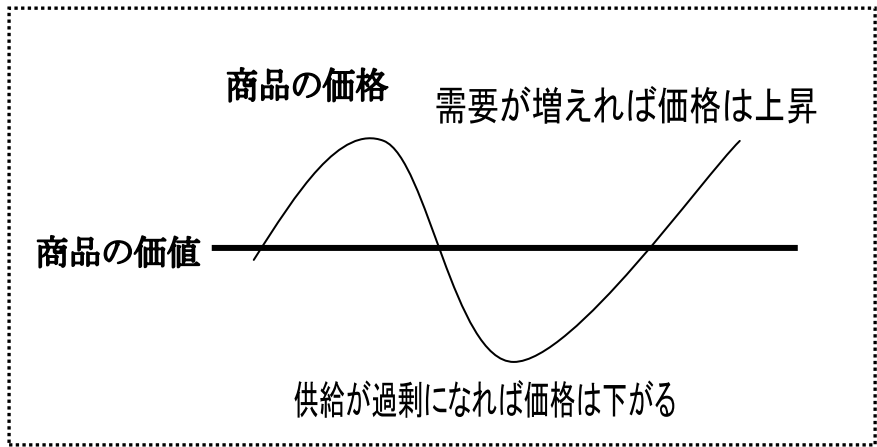
プロレタリアートの出現

司会IIこれで基本的な整理と理解ができたと思います。続いて、GOさんのレポートをお願いします。

GOII資本家がはじめてあらわれたとき、賃労働の形態はもうすでに存在していた。だが、賃労働は例外で、副次労働、補助労働、臨時労働であり、ときおり日当稼ぎで出ていた農業労働者も土地を持ち暮らしていた。

ところが、生産手段が社会的なものとなり、資本家の手に集中されると、彼らは資本家のもとへゆくより他に途がなかった。今や全生産についての賃労働は終身賃労働者となり、この時、封建制度は崩壊が起こり、封建領主の家臣団は解体し、農民は農場から追放されたために、こういう終身的賃労働者の数は恐ろしく増大した。

一方では資本家の手に集中された生産手段と他方では自分の労働力のほかに何も持たない生産者II賃労働者の分離は完成した。社会的生産と資本主義的取得との間の矛盾は、今や、プロレタリアートとブルジョアジーとの対立となって、明白に現れてきたのです。



司会 Ⅱ次は、71頁以降に出てきます

「市場における商品の法則が生産者を規制」とは何かを「価値法則」でSNさん説明して下さい。

SN Ⅱ 「価値法則」を説明します。

＊どんな社会でも自然に働きかけた人間の労働がなければ社会が成立し、存続することはできません。自然の法則に適応させて社会の発展をつくりあげていきます。

＊生産手段の私的所有と社会的分業という歴史的条件のもとで、生産物は商品になりました。

この個々バラバラに行われている生産と消費を結合させ、社会を存続させる法則が「価値法則」です。

＊交換するために作られる商品は、使用価値と価値との統一物です。使用価値とは、欲望を満たしてくれる有用性です。交換の比率を決めるのは、さまざまな生産物に共通する「実質的に同じ人間の労働Ⅱ抽象的人間労働Ⅱ

エネルギーの支出です。

この抽象的人間労働が商品の価値の実態です。価値の分量は、労働時間の長さによって決まっています。価値を中心としつつ価値の貨幣表現である価格により売買されます。

価格は需要と供給の法則により価値を中心として上下します。ある商品が過剰になれば、価格は下がり資本家は有利な生産部門へ移動していきます。市場にて商品の交換の比率（売買）によって、商品の不足と過剰がわかり、社会的総労働量が適正に配分されていきます。これが価値法則です。

つまり、個々バラバラに行われている労働が、商品の交換というかたちで結合され、社会の必要とする総労働をも交換比率を通じて各生産部門に配分する役割を果たしています。

次号は「産業予備軍、窮乏化の法則」を学びます。